

平田幸一先生追悼

平田先生の思い出

佐伯史談会会長

高木嘉吉

平田先生が長逝されたのは、昭和五十七年十一月二十一日で、やがて一周忌を迎えることになる。この際思い出を記して、会員の皆さんと共に遺徳を偲びたい。

私は若い頃は先生とは交渉を持っていない。私が大分県師範学校に入学した大正七年には、入れ替りに先生は師範学校を卒業されていた。

私が大正十一年三月に師範学校を卒業して、南郡の小学校に奉職した時には、先生は佐伯小学校に奉職していたが、接触する機会はなかった。

ただ文検に志していた私にとって、先生が文検手工に合格されたことは、先生に対する畏敬を深くした。先生は技術と人格を買われて、大分師範、池田師範と躍進されて佐伯を離れられたので、遂に先生のお話を聴いたり、作品を見せてもらったりすることはできなかった。

先生とお話するようになったのは終戦後である。終戦後、佐伯に帰った先生は、よく郡市内の学校を訪問された。当時上野小学校や昭和中学校に居た私は、こゝで初めて先生とお話する機会を持った。孔版のすぐれた技術を持った先生に学校の研究物の印刷製本を依頼したこともあった。

私は昭和三十年に退職して自由の身となった。当時鶴岡で郷土史研究に興味を持っていた羽柴・米沢・泉・広瀬の諸氏と鶴岡郷土史研究会を結成して、温故知新の道を進むことになったが、その道に造詣の深い平田先生は顧問的存在で、時に応じてお話を承ったものである。

その頃は郷土史研究は一種のブームで、弥生町・直川村・宇目町・蒲江町・青山村等に熱心なグループがあり、それぞれ活動していたが、昭和三十九年機が熟して、郡

市内の郷土史研究団体を一丸とした佐伯史談会が結成された。不肖私が会長に推されて今に及んでいる。結成当時顧問として柴田南華・山田平之函・疋田泉・益田学・平田幸一の五氏を依頼した。皆造詣の深い人であったが高齢のため次々に物故されて平田先生が一人残られた。

晩年の先生は八十才を過ぎて、昔スポーツで鍛えた身体にも老の影が忍び寄っていたが、意気はなお盛んで会の研修探訪によく同行された。この頃の印象が最も鮮やかである。難路には若い会員が介添えした。このうるわ



平田先生(左)と矢田清氏(右)

しい光景ももう見ることは出来ない。これは郷土を愛し郷土史を探求された先生が、後輩に郷土史研究者の姿勢を示した最後の教えと、いつまでも心に止めておきたい。先生の孔版印刷の『佐伯秘説録』『柵牟礼実録』が手許にあって、先生の息吹を伝えている。愛蔵愛読して、先生を偲ぶよすがとしている。

